

平成30年度 第1回吹田市シティプロモーションアドバイザー会議 議事要旨

1 日時：平成30年6月28日（木）10：00～12：00

2 会場：吹田市役所 高層棟4階 特別会議室

3 出席委員

北詰 委員長（関西大学 環境都市工学部都市システム工学科教授）

森 副委員長（吹田青年会議所 組織力向上委員会委員長）

佐賀 委員（吹田商工会議所 青年部専務理事）

伴 委員（サンケイリビング新聞社北摂事業部編集長）

大林 委員（ジュピターテレコム 関西メディアセンター池田事務所アシスタントマネージャー）

春貴 委員（市民ネットすいた 理事）

内海 委員（近畿経済産業局 通商部国際化調整企画官（頑張る自治体応援隊 大阪北部担当））

長谷部 委員（市民委員）

青木 委員（市民委員）

4 出席職員

原山理事、熱田次長、田中参事、白澤主査、高島主査、堀主任（傍聴者なし）

5 案件

(1) 平成30年度シティプロモーション事業について

(2) 市制施行80周年記念事業について

6 主な意見等

【委員長、副委員長の選任について】

事務局から、北詰委員を委員長に、森委員を副委員長にそれぞれ選任することを提案。満場一致で承認された。

（委員長）

シティプロモーションというテーマは、色々な意味合いを持っていると思う。ご出席者を拝見するに、各分野でアクティブに活躍しておられる、あるいは知識や経験を豊富にお持ちの方ばかりと拝察する。多少尖ったご意見をお出しただいた方が良いかと思う。むしろ、市が人員や予算等の制限から悲鳴を上げるくらいのイメージで進めていければと思っている。昨年に完成したビジョンを基に、今年は行動して形にする時期と位置付けて取り組んでいきたい。

（副委員長）

シティプロモーションのメニューとして実際に実行に移されているもの、研究中であり密度を濃

くしていくもの、今後の検討で新しく生み出していくものと様々な形があると思う。新しく委員に就任された方もおり、より良いものを生み出せるよう一緒に進めていきたい。

【案件（1）について】

（委員長）

まずは事務局からの説明内容や資料に関する質問をお受けする。各自の疑問を解決していただいた後、今後の活動に対するご提言をいただくといった流れで進めていきたい。

（委員）

完売したすいたんマスコットについて、購入者層はどのような方であったのか。また、これだけの反響を予想していたのか。

（事務局）

マスコットはガンバ大阪ユニフォームを着用したデザインであったことから、同クラブのサポーターの方に多く購入していただけた。用意した 1000 個が2日間で完売した後、急遽追加で 1000 個を製作したものの、またすぐに完売となった。SNS での拡散もあり、全国から問い合わせがあった。当初はこれ程の反響があるとは予想していなかった。今年度は種類を増やして販売する予定である。

（委員）

すいたんのグッズに関しては、著作権を持つ市の独占販売となるのか。それとも、外部による意匠の使用を認めているのか。

（事務局）

イラスト使用は限られたデザインのための許可制としている。商品のデザインに使用してもらっても構わない。

（委員）

限定品をスポット的ではなく、例えば T シャツやポロシャツの継続販売を検討していないのか。

（事務局）

類似の事例として、市の W リボンプロジェクトではポロシャツを事業者が一般向けに販売し、売り上げの一部を市の基金に寄付いただいている。シティプロモーション用のポロシャツも一般販売できればとの思いもあるが、市が販売するのであれば歳入歳出予算に計上するという予算上の制約があるため大量生産が困難。製作・販売を事業者に担っていただければ可能となると思う。一方、限定生産となることで希少性を持たせられるといった利点もある。

（委員長）

事業を単発、単品のように終わらせることが良い事か、次の議論につながると思う。予算措置が絶対的な制約条件であるのか気になる。

（事務局）

販売についてはそうなる。なお、販売目的以外の配布グッズも製作している。

（委員長）

これをテーマに議論ができると思う。

（委員）

市で販売が難しいのであれば、観光協会、商工会議所で引き受けていただけるとは思う。今年度に冊子を製作されるとのことであるが、掲載内容や発行部数、市外に向けたPRの意図など企画詳細をご教示いただきたい。

（事務局）

写真をふんだんに掲載し、市を紹介する内容となる。基本的には市民向けであるが、職員が市外へ出張する際の配付物としても活用したい。部数は2年間分として2万部を製作する。

（委員長）

地域への愛着は様々なメカニズムから成り立つ。市自体を知ることだけでなく、外部から褒められることも要因となり得る。手段として冊子が相応しいかという点は別として、外部へのPRがまちへの愛着の醸成に無関係とはならない。

（委員）

NTTとの連携協定に伴う事業について、現在はどのような状況であるのか。

（事務局）

昨年の協定締結後、連携事項について両者の担当者間で協議を重ねている最中である。具体的な企画はまだ決まっておらず、今後進捗があればお知らせさせていただく。なお、検討の一例として、千里丘北小学校での英語教育がある。過去2回の試験実施では、ICTで海外と中継を結び、児童が現地の方と英会話に挑戦した。市制施行80周年時には友好交流都市であるオーストラリアのバンクスタウンの小学校と同様の試みができないかと思案している。

（副委員長）

ICTを用いたシステムの活用について、外部団体との連携は可能であるのか。

（事務局）

各事業所等との連携も可能である。ご提案に応じて、個別に検討させていただきたい。

（委員）

シティプロモーション推進にあたり、国際交流やインバウンド、企業誘致の視点が重要となると思う。ビジョンにはこの記載が見当たらないが、策定時にはどのような議論がなされたのか。

（委員長）

本会議を進めていくに当たり、インバウンド等について積極的に取り入れていく可能性の有無についても併せてご回答いただきたい。

（事務局）

吹田市のシティプロモーションは、まずは市内に住んでおられる市民に吹田への愛着を持っていただくことを目標にしている。観光客を獲得することや移住を第一の目標とはしていない。ただ、市内にいられている留学生や外国籍の方への視点は必要であることから、国際交流協会とも連携を検討してきた。また、文化行政担当部署が多文化共生を推進するための指針を昨年10月に策定しており、ご意見をいただければ同担当や、吹田にぎわい観光協会とも連携しながら検討を進めていく。

（委員）

インバウンドだけでなく、吹田市では研究施設が充実していることもあり、これを発展させるために海外からの高度な知識者に移住してもらう視点が必要だと思う。

（委員）

ビジョン策定の当初は、最先端技術や高度な研究施設に焦点を当てた議論があった。市からは、移住人口の増加ではなく市民に安定して住んでいただくことに重点を置く旨の説明があり、都市格を上げていくための議論がなされた。

（委員長）

本会議ではビジョンを100%踏まえる訳ではなく、新しい視点を入れたり、これまでの議論であまり取り上げられてこなかった項目を強調して取り上げたりしても問題ないか。

（事務局）

問題ない。

（委員長）

優秀な人材に移住してもらう取組は、今住んでいる市民へのプロモーションというビジョンの観点と異なるかもしれないが、都市格を向上させるためには有益なご提案かと思う。また、外国籍の方にターゲットを絞って情報発信をする場合、当人が母国で吹田市の良さを広めてもらうことができれば、素晴らしいシティプロモーションとなると思う。

(委員)

一説によれば、海外で知られている日本の都市は、東京と京都程度である。世界に向けてではなく、留学生に絞って外国人にも理解できるような発信方法を考えた方が良いと思う。

(委員長)

質問以外の意見も受け付けたい。改善意見などがあればご発言願いたい。

(委員)

シティプロモーションでは幼児教育が大切だと思う。すいたんを活用して園児に吹田市の良さを広めていければ良い。

キャラクターグッズの人気が出ることにより、ネット上で高値で転売されることはプラスのプロモーションとして捉えることもできる。ノベルティグッズの一案として、クリップ部分にキャラクターをデザインしたボールペンも良いと思う。ポケットに入れたときにバッジのように見せることができる。

(委員)

ふるさと納税の導入後、吹田市では税収が減っており、これを補填する収入を確保できる継続した仕組みを構築する必要がある。一例として、すいたんを使用したLINEスタンプの販売は如何か。

(事務局)

既に事業者が作成、販売している。市は申し出に基づき、無料で使用を許可している。

(委員)

新たなスタンプの販売も可能である。行政サービスの水準を維持するための歳入確保といった視点も必要と思う。

(委員)

Instagramの運用をいつから始めるのか。他のSNSとの連動など、フォロワー獲得の方針はあるのか。

(事務局)

9月頃から運用を開始する。すいたんSNSとは異なり、市職員が市内の風景などを掲載する。これと併せて、市民の方からの投稿もシェアしていくことを考えている。

(委員)

良い取組だと思うが、市内のスポットに見物人が集中することで周辺住民に迷惑が掛かり、定住

意向に対してマイナスに働くのではと心配される。マイナス面とのバランスの取り方が難しいと思う。

（委員長）

議論の全体としてビジョンの展開や目的といった全体的な話と、個々の魅力的なメニューについて平行して議論が進んでいるので、引き続き案件（2）についてもこの方向で議論をすすめたい。

【案件（2）について】

（委員長）

前半のシティプロモーション事業の議論に関連付けても、単純なアイデアでも構わない。質問なども含め自由にご発言いただきたい。

（委員）

将来的に財産となるような、市が発展する施設を設置してはどうか。既に存する魅力、ガンバ大阪、太陽の塔、北大阪健康医療推進都市などの関連施設でも良い。

また、国が推進するような先進的な行政サービスを導入するなど、行政改革に取り組んでも良い。

是非今回の取り組みが吹田市のレガシーとなるようなものにして欲しい。

（委員長）

将来的に市の財産になるものにする、ということは大切だと思う。また行政として先進的な取組を、80周年を機に進めるというのはいい意見だ。

（委員）

事業目的を考えるにあたって、市の魅力発信・発掘だけでいいのか。市の魅力は市民が築いてきたものか、与えられてきたものかによって価値観が変わってくる。

（委員）

「食」をテーマに考えて吹田で何かできないか。出荷量が少ない吹田くわいで商品を作るのは難しいので、「吹田カレー」「吹田コロッケ」「吹田からあげ」等こじつけでも構わないので継続的に販売できるご当地グルメが作ればいいのか。高槻にはうどん餃子がある。また過去の映像を使って未来につながる映像コンテンツを作ることもできる。

（委員）

シティプロモーションのビジョンに沿う事業を展開していかないと、ブレてしまう。スイタブルシティの考えをしっかりと掘り下げて実施しないと、ただの周年事業になってしまう。

市民にとって有益なことを考えないといけないのでは。「記念事業やってる場合じゃないプロモーション」として、たとえば全市全街に「防犯カメラ」を設置するとか。個人的にはそのほうが有益だと思う。お祭りにすることを市民が求めているのか。

（委員）

華々しいコンテンツにこだわらず、街や市民のために活動している身近な人やグループを取り上げて発信しては。自分が住んでいる街にはこんな人がいるのか、という誇りの醸成につながるのでは。

（委員）

一般市民からすると、70周年や80周年の存在を知らなかったので情報発信をしっかりとすべき。また最近特に希薄になってきたと感じる地域でのイベントに力を入れてくれると嬉しい。もう一度地域の結びつきが感じられるイベントをしてほしい。

（委員長）

地域のイベントに「80周年」という冠をつける手法もありますね。

（委員）

地道に地域で掃除している人など、人やグループにスポットをあてて紹介しては。

（委員長）

福井県大野市が「大野人」という企画をしている。街に住む人を紹介している。吹田市でもそのようなことをしてもいいのでは。

（副委員長）

80周年を機に、市民のみなさんが可能性を広げられるような事業になればいい。

（委員）

行政史のような記録は必要。節目で振り返るということも大切。

（事務局）

70周年から80周年の間の10年間は、万博やスタジアム、健都など、大きく変化があった。人口もV字回復をしてきた時代でもある。そういうところを掘り下げて文章に残すことも考える。市民力にスポットを当てるといいアイデア。参考にさせていただきたい。

（委員長）

まとめとして、前半のシティプロモーションの事業については、単発に終わらずに長く継続的にできようにするという視点と、外部からどういう風に見られるかという視点が必要という議論になった。後半の80周年事業については、3つの議論があった。一つは将来の財産になるもの、二つ目はひとり一人の心に残るもの、三つ目は市が生まれ変わるきっかけとなるもの、という意見に集約できると思います。